

初めて幕府老中になった

松山城第十四代藩主

松平 定昭

元松山市考古館長
伊予史談会会員

大野 慶一

一、松平定昭の登場

松山藩第十四代藩主の松平定昭は弘化2年(一八四五)11月9日、伊勢国安濃津の津藩主藤堂高猷の四男として生まれた。安政6年3月第13代藩主勝成の養子となり、文久元年2月養女(勝善の娘)邦姫と結婚した。同年一月に侍従・溜間詰に任じられ、長州征伐の頃

より藩主勝成を補佐して藩政に關与する。

慶応3年(一八六七)勝成病氣隠居のあとをうけて、22歳の若さで襲封し、松山藩第十四代の藩主となった。同年9月、老中となり、まもなく老中首座となった。この時わずか年23歳であった。

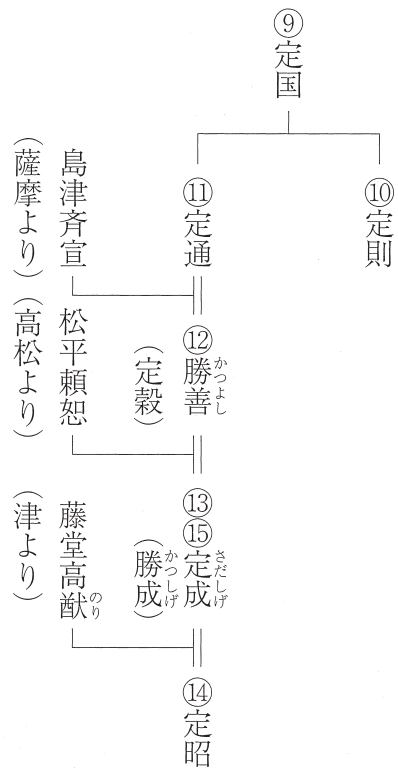
勝成隠居の意志は、京都滞在中の老中板倉勝静にあてて内々に伝えられていたが、



第十四代藩主、松平定昭肖像画

正式には、上京した世子定昭より、勝成の隠居と定昭の家督相続が願われ、合せて伊予守と称することも命ぜられた。かくして定昭は衆目の期待により

松平家略系図



二、長州征伐と定昭

幕政の中樞老中として將軍を補佐し、多事、多難な幕末期を処理することになった。

「8月18日の政変」や「禁門の変」によって長州藩は敗れ、本国に逃げ帰った。幕府はこれを好機として長州征伐の命を諸藩に下した。松山藩は藩主勝成に四国軍の先鋒として長州に向かうよう命ぜられた。

しかし、長州藩では恭順派が主戦派を抑えて勢力を得、謝罪の誠意を示したので、第一次の長州征伐は中止となった。其後、翌慶応元年(一八六五)主戦派の高杉晋作らが藩内の恭順派を抑えて、藩論を統一し、軍備を増強して幕府

の命令に従わなかった。こゝに第二次の長州征伐がはじまったのである。松山藩は前回同様、長州征伐の中核として藩主勝成の嗣子定昭はみずから軍を率いて三津浜に待機し、やがて安下荘に上陸した。しかし、四国の他藩の来援もなく独力では長州藩を制圧できないので興居島に引き揚げた。

この間、7月には將軍家茂が大坂で逝去し、慶喜が將軍職を継いだ。その後、幕府の重鎮であった会津藩主松平容保と桑名藩主の松平定敬らは相談して、翌3年(一八六七)9月23日に松山新藩主の松平定昭を老中職に任じて、この難局を打開しようとしたのである。剛邁で名を知られていた定昭だから幕府側から期待されるところ

が大きかったに相違ない。

三、大政奉還と老中辞任

老中就任に関しては、藩の重臣の中には、多難な政局における定昭の身を心配し、老中職就任に反対する意見もあった。そのため定昭自身、家督相続の直後であり、藩内の武備を固めることに専念したいとして、翌24日には、辞表を提出したが許されなかった。大政奉還4日後の10月19日に至って、漸く辞任が認められることになった。こうして定昭の老中就任は1ヶ月足らずの短期間に終わった。



第十四代藩主、松平定昭

しかしこのことは、松山藩が幕府に近い親藩であるにもかかわらず、幕府の危機に当たって責任を回避したとして、幕府や他の親藩からの信用を失うことになったと思われる。これも定昭が生来、剛胆であり、率直な性格が、幕末のこの時機に当たり、これを回避することができるとの期待から老中首座に収まったものであり、僅か一ヶ月足らずで辞任したことは惜しみて余りあることである。

四、戊申の役と松山藩

慶応4年1月、将軍慶喜を擁し

た会津、桑名の両親藩兵が将軍の入京を阻む薩摩、長州の両藩兵と鳥羽、伏見で交戦したが、このとき会津、桑名などの親藩から疎外されていた松山藩は、前線に加わらず専ら後方整備にあたっていたから薩摩、長州に官軍に対し直接敵対行動をとったわけではなかった。

しかし、会津、桑名など親幕派諸藩とともに朝敵とみなされ、追討されることになった。

松山藩に対しては、四国鎮撫官軍の先鋒として土佐藩兵がやってきた。これに対し勝成、定昭はじめ藩士一同恭順の意を表したので官軍による松山開城は、平穩のうちに終わった。このような恭順な態度により、同年5月定昭に対し「寛大の御仁慈を以て、蟄居仰付られ候事」との達しがあった。

五、松山藩追討と土佐藩の進駐

松山藩追討の命をうけ、松山に入った土佐藩の軍兵は、大変紳士的な態度で、城下町に対しては平常通り営業活動をするよう通達を出し、藩内領民の罪を許して欲しいという嘆願も出し、朝廷に対しても前藩主勝成の寛大な処置や定昭の謹慎の様子報告も兼ねて免罪嘆願書を取り次いだ。新政府が松山藩を許したのは前記のように5月に入ってからである。

松山藩の赦免については慶応4



松平勝成、定昭「赤心報國」

年（一八六七）5月に入ってから土佐藩の多大の好意によって嘆願と恭順の実が認められたことによる。

其の節の約定として次の三点があげられる。

(1) 藩主定昭については宸襟しんまきんを悩ませ、慶喜の妄拳を助けた罪により蟄居を命ずる

(2) 前藩主勝成に再勤を命じ、十五万石の本領はもとのまま下賜する。

(3) 藩士には、現在東北戦争の多事の中であり、出兵を命じるどころであるが、既に諸藩兵が出陣しているのに、軍費として金十五万両を献納せよ。

明治元年（一八六七）9月3日京都・大坂の松山藩邸が返還され、翌年3月6日になって、漸く定昭の蟄居が許された。

初めて幕府老中になった松山城第十四代藩主

Sadaaki Matsudaira

六、定昭の人となり

定昭は大政奉還後、老中を辞任して帰藩したが、藩内では連日激しい論争が行われた。抗戦か恭順かを巡っての行く末についての話し合いである。大政奉還後の薩摩・長州の暴行は目に余るものがあり、藩の全力を挙げて徳川の恩顧に報いようとする比較的若い重臣と定昭近習の人々の考え方が主戦派であった。

しかし、前藩主勝成以下家老たちは恭順によって藩主・藩領の安泰を図るのが得策であるとの考え方が、三上是庵や大原親山たちの献策により朝廷に恭順する事になった。藩主定昭は明治元年1月25日、謹慎の実をあげるため、松山城を出て菩提寺の常信寺（祝谷）に入った。

定昭は生来病弱であり、8歳の時に唇口に腫れ物があったり、脚気の気味があったりしたようである。版籍奉還後、前藩主の知藩事のあとを受け、知藩事になったがやがて松山藩は松山県となり、旧藩主は東京移住が命じられて松山を離れることになった。

上京後、明治5年に三田邸を売却し、浜町へ移ったが、七月に入り病気が悪化し同月19日、わずかに28歳で逝去した。墓所は亀塚の済海寺にあり、遺言によって遺髪は松山常信寺に納められた。

定昭の性格は、正直で、率直であり、何事にも器用であった。武術では馬術を得意としたといわれている。尚、生活は衣食住とも質素でありいつも木綿を着、無益の物好みなどはしなかったという。

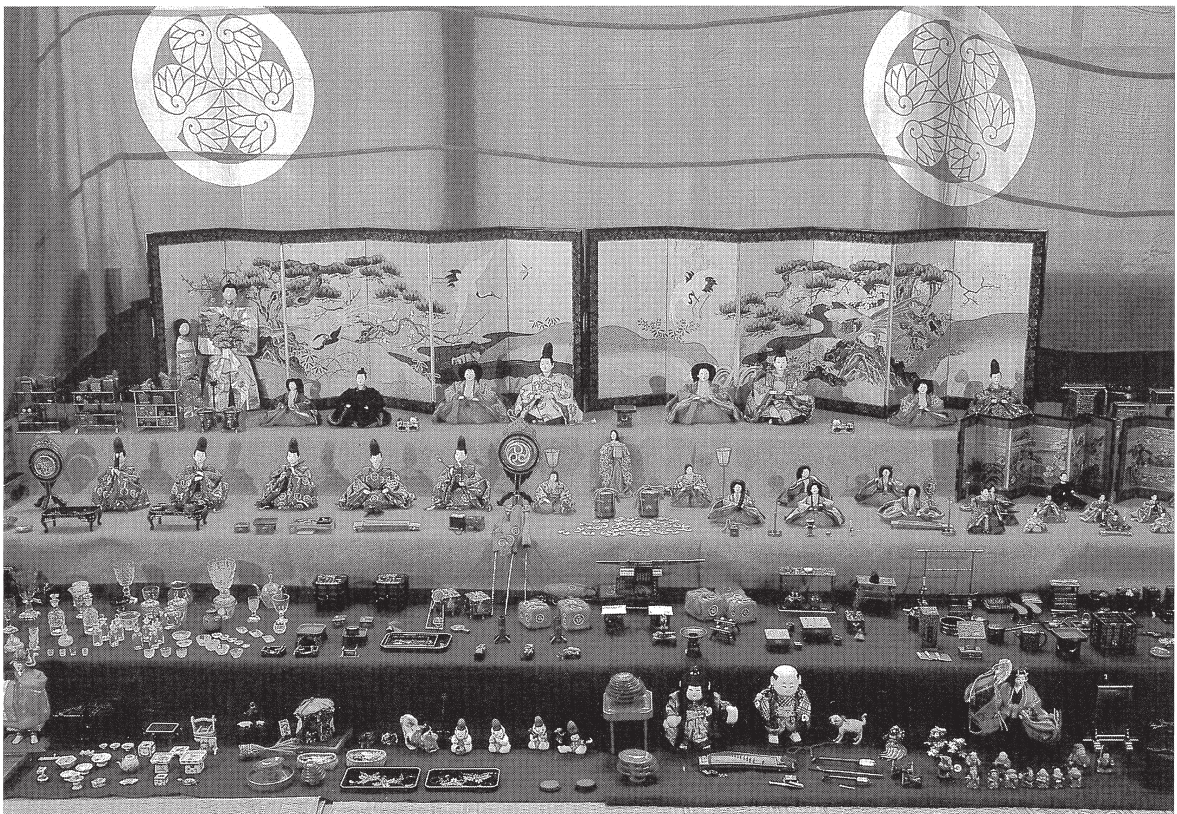
毎日の読書を習慣とし、詩作を好み、作品も多くを残している。遺作「七年王事神京ノ雪月風花不耐情」の句には、定昭の心情がよく表れている。朝敵の汚名を受け若侍を擁して薩摩、長州に官軍側に一矢報いんとした気概はまことに壮であり、其の意気まことに賞すべきことではある。先に述べたように鳥羽伏見の戦いの後、松山藩は朝敵となり、翌慶応4年5月13日、新政府より蟄居を命じられ、前藩主勝成が再び藩主に復することになったため、定昭の藩主としての地位は、8ヶ月弱の短期間で終わった。

しかし、幕末の難局に乞われて老中となり、その衝に当たったことは、歴代松平家の中で只一人であり、永く松山藩の誇りとするところである。

〈参考文献〉

- 一、伊予の歴史 景浦 勉
- 二、松山の歴史 松山市
- 三、幕末維新の松山藩
- 四、財団法人愛媛県文化振興財団
- 五、四国大名歴史絵巻 NHK編
- 六、愛媛県の歴史 田中歳雄
- 六、松山市史 第二巻 近世

松山市



松平家伝来のひな飾り。松平定昭公の奥方、邦姫様の愛蔵品だったと伝えられる